

第二言語習得を促進する指導

浜松市立南陽中学校 教諭 杉谷 紘史



国名 フィリピン共和国
令和6年11月20日～12月3日

この20年ほどの間に、日本ではさまざまな英語教育の改革が行われ、子供たちの英語力は着実に伸びてきた。しかし、国が目標とする英語力のレベルまで到達できている人数は思うように伸びていない。第二言語の習得においては、母国語や発達環境などが影響を与えているが、日本と同様に欧米から離れていて、英語を第二言語として教育を行っている国でも、日本よりも英語の習得が進む国も見られる。今回はその中の国の1つであるフィリピンでの英語習得の指導法等について調査したいと考え、本研修に臨んだ。

－ 訪問先の概要 －

- ・ Claro M. Recto Information and Communication Technology High School ・ Pampanga High School
- ・ マニラ日本人学校 ・ The Beacon School

Claro M. Recto Information and Communication Technology High School (G7～10・中1～高1年代) アンヘレス市にある公立学校。住宅街の中に位置し、限られた敷地の中にある学校。もとは小学校のみであったが、2008年から現在の学校の形となった。生徒数は年々増加し、現在は1800名を超える。中1と中2は7時から15時で授業を行っているが、他の学年は教室数が足りないため、中3は6時から12時、高1は12時から18時に授業を行っている。教育省の方針として、入学希望者は基本的には全員、受け入れている。

Pampanga High School (G7～12・中1～高3年代) サンフェルナンド市にある最大の公立学校。広大な敷地をもち、100年以上の歴史をもつ学校。校舎は複数あるが、生徒数が5000人を超えるため、学年ごとに6時から12時と12時から18時までを授業時間として、時差登校を行っている。普通コースの場合は基本的に全員が入学できるが、放課後にスポーツや演芸などの特別授業を受けることができるコースに入学したい場合は試験に合格しなければ入ることはできない。

マニラ日本人学校 (E1～H3・小1～中3年代) タギッグ市にある日本大使館附属の私立学校。海外にある日本人学校の中でも規模が大きい。小学部と中学部を合わせて約450人の児童生徒が在籍し、敷地も広く、設備も充実している。英会話を行う専用の教室や外国人講師が勤務するなど、英語教育に力を入れている。英語教育に対する保護者からの期待も大きい。また、現地理解教育として、フィリピンの歴史や文化などを授業や修学旅行などを通して学んでいる。

The Beacon School (K～G8・幼～中2年代) マカティ市にある私立学校。約300人の生徒が在籍する小規模なインターナショナルスクール。フィリピン国籍の子供が大半であるが、母国語は英語である。一部、英語を第二言語とする生徒も在籍しているため、彼らを対象とした特別な取り出し授業も行っている。フィリピンで初めて国際バカロレア教育を導入した学校。

－ 調査結果 －

「英語」を使った授業

フィリピンの公立中学校では主に8教科が教えられている。教科の特性や母国語の確実な定着を図るため、タガログ語と歴史、道徳の3つは母国語で行われている。それ以外の英語や数学、理科などの5教科は教員からの指示や生徒の受け答えまで全て英語によって、授業が行われている。生徒の実態に応じて使う英語のレベルを変えたり、母国語によって補足したりすることはあるが、必要最低限である。インターナショナルスクールは全て英語、日本人学校は英語の授業のみとそれぞれの学校の目標に沿った取り組みとなっている。



授業中の生徒の様子

どの学校の英語の授業においても、授業のスピード感が重視されていた。リズムよく教員から出される質問や指示を子供たちは集中して聞き、テンポよく反応していく。教員側を子供たちに母国語に置き換えるような時間を与えるのではなく、英語の質問や指示をしっかりと英語で考えるように授業の進め方が意識されていた。

教育省の取り組み

フィリピンでは、日本の文部科学省にあたる教育省が学校教育において、さまざまな役割を果たしている。教育省が行う重要な役割の1つとしてカリキュラムの設定がある。細かい授業の進め方などは各教員に任されているが、1年間の中でどのような内容をどのように学習していくかは教育省が設定している。そのため、教員は子供たちへ指導することが明確になっている。教員による指導内容に差が少ないため、学期ごとの定期試験において英語や数学、理科などの教科は教育省が作成した試験問題を解いたりすることもある。子供たちへの評価に関しても、英語の授業では、パフォーマンステストで50%、ライティングテストで30%、提出課題で20%を評価と割合が定められているため、他の教員間や学校間での相違はあまりなく、統一された評価が可能となっているようである。



英語科教員研修会の様子

教育省は他にも子供たちの情報が記録されている文書をデジタル化して、ネット上で管理し、関係教職員のみが見られるようなシステムにしている。このことにより、紙媒体への記録の記入などがなくなり、教員の業務が改善されるだけでなく、子供の学習履歴なども蓄積されていくため、子供たちへの個に応じた指導が可能となっている。また、教員の指導技術を向上するために、研修の設定にも意欲的である。校外での研修会を定期的に行ったり、校長など管理職の教員が研修を受け、校内研修で伝達したりするなど教育に関する新しい情報を教員へ伝えている。研修を受けることによって、子供たちへの質の高い授業につながっている。

子供たちの学ぶ意欲

フィリピンの子供たちが幼少期や小学生の間にどれだけの量の英語に触れてきたかは個によって異なる。そのため、英語教育が始まる段階では理解力に差がある。しかし、その後、子供たちは授業の中で英語に触れる機会が多かったり、英語を学ぶことの必要性を普段の生活の中で感じたりするため、英語を学ぶ意欲は総じて高い。また、フィリピンの教員は子供の称揚が上手く、子供たちは褒められたいこともあって意欲的に授業に取り組んでいる。

日本の中学生は入試など限定的な場面で英語の習得を必要としていることが多い。もちろんフィリピンでも、高校や大学入試、将来の職業選択のために勉強していることもある。しかし、英語が生活に身近であることや将来なりたい姿がはっきりとしているため、英語学習に取り組む意識が日本に比べると圧倒的に高い。フィリピンとは違い、そのような環境下にはない日本の子供たちにも、どのようにして高い意識をもたせることができるかが今後の課題である。

－ 研修を終えて －

研修成果の活用・還元

本研修を通じて学んだフィリピンの教育事情などについて、本校の教職員へ校内研修の場で紹介した。また、今後は地区の研修会などでも学んだことを発信していきたい。

本校の生徒には、担当する英語の授業でフィリピンの学校のことや文化などについて写真や実物を踏まえながら紹介した。また、フィリピンの学校や学校関係者とのつながりもできたので、生徒同士の交流を行うことができればと考えている。

今後も第二言語の習得についての研究を進め、今回の研修で得たことをさらに意味あるものとしていきたい。

感想

フィリピンの公立学校は日本の学校に比べて、施設や設備の面で不足している部分はあるものの、そこに勤める教員は限られた中で最大限のことを行おうとしていた。教員の行う仕事量に対して、給与が少ないため、教員を志望する人間が少なかったり、高い給料を求めて海外へ働きに行ったりする人が多いようである。しかし、そのような中で、目の前にいる子供たちの成長のためにできることをしたいというフィリピンの先生たちの姿勢には見習うべき点が多かった。国や言語、教育システムなどさまざまな点が異なっている、子供たちの成長のために活動しているということは変わらないのだと実感することができた。自分自身も常に学び、子供たちのために指導力を高められる教員でありたい。

－ おわりに －

今回の研修は自分自身の指導力向上につながる貴重な機会となりました。このような研修の機会を与えていただいた、ふじのくにグローバル人材育成基金に関係する皆様に心から感謝申し上げます。今後の教職員人生に必ず生かしていきます。

児童一人一人に寄り添った指導の実現を目指して

浜松市立豊岡小学校 教諭 宮崎 慎也



国名 フィンランド

令和6年10月27日～11月9日

「ICTを活用した教育の充実」「特別なニーズをもった児童と共に高め合うインクルーシブな学級経営」「第二言語としての英語習得」の3点を研修課題の中心としたい。

研修課題の設定理由は、フィンランドではジョブシャドーイングという研修スタイルで、これらの点について実際に現地の様子を体感できると同時に授業者との事後研修でフィードバックを得られる点も考慮した。

－ 訪問先の概要 －

- ・ヴァンター市 カルタノンコスケン小学校（1年生から9年生）児童・生徒数約850人 教員数 約70人
- ・ラハティ市 カサッカマキ小学校 児童数約310人 教員数・カウンセラー・アシスタント計24人
- ・ヘルシンキ市 ラウッタサーリ小学校 児童数約220人 教員数20人

－ 調査結果 －

個に対する温かな関わり

今回のフィンランド訪問で最も印象的だったのは、先生の児童への関わり方だ。ほとんどの先生が児童と近い距離で目と目を合わせてじっくりと話をする姿を非常に多く目にした。参観しながら私は、児童が「先生は自分のことを大切にしてくれている」と感じるだろうと思った。日本と比べて学級の児童数が少ないからできると片付けてしまえばそれまでだが、これからの自身の教員生活に生かしたいと感じた点だった。



2年生 2クラス合同授業

3人目のクラスの先生が、個別指導中

ICTを活用した教育の充実

プロジェクター、スクリーンとしても活用できるホワイトボード、複数台のテレビモニター、実物投影機が各教室に標準装備。学校保管の1人1台端末の活用に加え、担当教師の許可のもと児童自身の1人1台のスマートフォンによる「Kahoot!」を用いた授業も行われていた。また「Wilma」という保護者が児童の出欠席や学習状況をインターネットを通じて把握できるシステムも運用されていた。さらに「WhatsApp」という携帯アプリを用いて教師が側面黒板に書かれた宿題を授業の進行と同時にクラスの保護者に送信する様子も見られた。これにより欠席児童のみならず、出席している児童の保護者も学習内容の進捗をリアルタイムで知ることができていた。様々な場面でICTを活用し効果的・効率的な業務が行われていた。

特別なニーズを持った児童と共に高め合うインクルーシブな学級経営

訪問先の先生にインクルーシブ教育について尋ねると、多くの先生に共通していたのは、「フィンランドにも特別支援学級や特別支援学校はあるが、理想は、私のクラスでなるべく全ての子供が共に学習することだ。」という発言だった。どの教室に行ってもイヤーマフがいくつも置いてあり、衝立の陰で学習できる環境が用意されていた。教室には児童数以上の椅子や机が常に取り、その中にはソファやビーズクッションのようにリラックスして座れるようデザインされたものもあり、そこで学習することも認められていた。また、ランチではベジタリアン用のメニューや、乳糖不耐症への配慮で、数種類の乳飲料も用意されていた。学校内での教育に限らず、フィンランド人の根底には、個々に求めるものが違うのは当然で、可能な限りその選択肢を提供するという考えがあるように感じた。こうした考えが多様な価値観を許容できる風土を育てるのだと感じた。

第二言語としての英語習得

母語であるフィンランド語に加え、多くの国民が英語を流暢に話し、スウェーデン語も読み書きは問題なく使用できるレベルとのことだった。多くの小学校で英語は1～3年生から、スウェーデン語は6年生から学習する。さらに小学校4～6年で選択外国語として、ドイツ語、スペイン語、フランス語の中から4つ目となる言語も学習する。私自身の体感としては、小学校4年生ぐらいを境に英語でのやりとりが可能となり始め、中学生ともなると、どの子もスラスラと英語を話しているように見えた。英語が流暢な理由について、多くの先生がSNSの普及を挙げた。もともとフィンランドで英語のテレビ番組を見ることもできたが、SNSの発達により、児童が英語に触れる機会が激増した。英語の習得についてはメリットが大きく、若い世代ほど英語の習熟ができていると話していた。英語を話せる場所があることや、英語で娯楽に親しむ機会などが児童の英語力向上に寄与しているようだった。英語授業の内容についても、20年ほど前までは文法重視だったが、今は「話す・聞く」に力を入れていると話していた。訪問で実感したことを今後の外国語指導に生かしていきたい。

－ 研修を終えて －

研修成果の活用・還元

訪問中は現地校の子供たちと所属校の児童でオンラインによる簡単な国際交流を実践した。帰国後は担当学年の各クラスにてフィンランドの学校の様子や文化、学習内容等についてスライドショーで紹介を行った。所属校の教職員には、事前にフィンランドに関する質問を募集し、質問事項について現地調査の結果を伝達した。今後は研修で学んだことを自身の教育実践に生かすと共に、浜松市の発達支援教育を根幹に据えた教育活動・国際理解教育の推進に貢献したいと考えている。

感 想

「ICTを活用した教育の充実」「特別なニーズをもった児童と共に高め合うインクルーシブな学級経営」「第二言語としての英語習得」の3つの視点全てで、フィンランドの教育の強みを体感することができた。ここで得た知見を今後の教育実践に生かしていきたい。

今回の訪問で「充実した施設・設備」「少人数クラス編成による手厚い教育支援」「多言語学習」「休み時間や給食のシステム」「教室の自由度の高い雰囲気」等、日本との違いを実感することが多かった。一方で子供たちにより良い教育を届けたいという熱意は、日本もフィンランドも変わることがなく、訪問先の先生方がより良い教育について、研修で活発に意見を交わす姿が印象的だった。教員同士の関係作りについても学ぶことが多かった。例えば、ラウッタサーリ小学校では、同じ学校の中でメンターとなる先生とペアを組み。カルタノンコスケン小学校では、「ウェルビーイング」や「授業改善」といったテーマごとに先生が小グループを作っていた。カサッカマキ小学校では、先生が1、4、7年生、2、5、8年生、3、6、9年生で縦割りの小グループを編成していた。このように意図をもって先生同士が小グループで自由な雰囲気で見聞交換をできる場を設定することで、お互いの教育観を共有したり、より良い授業実践につながったりしていることに感銘を受けた。教員同士のよりよいコミュニケーションについても所属校の研修体制に取り入れられる可能性を感じた。今後の自身の教職生活で実践していきたい。

－ おわりに －

2週間の研修をフィンランドで行うことができ、自分の教育観を広げることができました。自ら研修テーマや研修先、研修方法を設定可能だったことで、充実した学びの多い研修となりました。

最後に、本研修を実施するにあたり「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援してくださった企業・団体の皆様には心より感謝申し上げます。今後、フィンランドで得た知見を他の先生方に共有したり、自らの実践に生かしたりしていきたいと強く思っています。

オランダに学ぶ共生社会の在り方

浜松市立河輪小学校 教諭 山本 紗綾



国名 オランダ王国

令和6年 8月24日～9月1日

子供たちが自ら考え行動したり、協働的な活動を通して課題解決をしたりするための教授法の研修を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化充実の実現につなげていく。また、自校を含め浜松市で増加傾向にある外国人児童生徒をはじめとした子供たちの多様化に伴い、個性を大切にし、他者を尊重する心情の育成を目指し、イノベティブな教育を学ぶ。

訪問先の概要

- ① SALTO International School ② SALTO Montessori De Trinoom ③ Automotive Campus
④ SintLucas ⑤ Jenaplanschool Hanevoet

① SALTO International School：4歳から12歳の子供がオランダ語と英語の両方を学習するインターナショナルスクールで、IPC（国際初等カリキュラム）を基盤としたバイリンガル教育を行っている。

② SALTO Montessori De Trinoom：モンテッソーリ教育のシステムを取り入れた小学校。子供たちは、グループごとに配置されたテーブルで一緒に活動をし、21世紀型スキルの習得に重点を置いた学習活動に取り組む。

③ Automotive Campus：自動車産業に関する企業、知識機関、教育機関が一体となった施設。約600人の学生を含む1250人以上の人々が、未来のモビリティ・ソリューションに取り組んでいる。

④ SintLucas：デザインや映像の分野に関する職業訓練を行う高等教育施設。個人学習だけでなく、実際のプロジェクトに取り組むカリキュラムがある。

⑤ Jenaplanschool Hanevoet：4歳から12歳までの子供が通うイエナプラン教育を基盤とした小学校。適正、学習、作業ペースに応じたグループ（複数学年）で教育を行っている。

調査結果

感情の共有

視察先の初等教育機関で必ず目にしたものが、「カラーモンスター」の掲示である。感情を色で表現することを通じて、自分あるいは相手の感情を視覚的に理解することができる。学級では、自分の名前が書かれたクリップをその日やその時の気持ちの場所に挟むことで、気持ちを学級内で共有している。誰かが「悲しい」気持ちにある時は、学級全体でその子の悲しみを共有し、寄り添う時間を作る場合もある。感情の共有は、人間関係を構築する上で重要な働きをもっており、知識や視野を広げることにもつながっている。「カラーモンスター」以外にも、自分にとって嫌なことがあ



視覚教材「カラーモンスター」

たとき、意見が対立したときにどのような流れで対処・解決をすることができるかイラストと言葉で示された掲示物や、遊びに誘うことが苦手だけれど誰かと一緒に遊びたい子のための「一緒にあそびませんか？」と書かれたベンチがあった。自分の気持ちを他者と共有することの有効性を幼少期から繰り返し学び身に付けることは、気持ち以外の面（知識や文化など）でも対話することの大切さに気付くことができる。

自立と責任感を促す自主的な学習

児童一人一人には「week task（一週間にやる課題）」が与えられ、それを基に学習を進めている。内容は、四則計算・スペル・リーディングなど大きな枠組みがあり、その中で何をするか細かく書かれている。児童は問

題集やタブレット端末を用いて課題をこなし、終えたらweek taskにチェックをしていく。個々に取り組む児童が多いが、必要であれば教師と一緒に学んだり、質問をしたりすることができる。低学年のうちは課題が明記されているが、高学年になると枠組みのみ提示され、自分で学習を計画し作り上げている。この方法は、児童が課題に対して当事者意識をもつことができ、主体性を持って取り組む姿勢やマインド計画、進捗状況に責任をもつことを促すことにつながっている。

学ぶ「場」や「方法」の自由度が高い。イエナプランやモンテッソーリ教育を基盤とした学校では、2学年もしくは3学年の児童で学級が構成されている。そのため、誰もが「教える」「教わる」両者の立場を経験することができる。一人で黙々と課題に取り組む児童がいれば、友人とともに助言をしながら取り組む児童たちもいた。「場」は教室にとどまらず、廊下にも学習スペースが設置されていた。静かに学習したい子のための防音用イヤーマフを自由に使用することができたり、じっとすることが苦手な子のために揺れる椅子があったり、教具・教材にとどまらず個別最適化につながる学習環境が整備されていた。



同じ課題、異なる学習方法

多様性と相互理解

SALTO International Schoolは様々な国籍の児童が通っているため、それぞれの文化を尊重した取組を行っている。在籍児童の母国の祝いごとがあるときは、学校全体でその文化を体験する時間を設けたり、多国語の本を図書コーナーに置いたりする工夫がされていた。そのような取組は、互いの文化を理解する大きな機会となっており、子供たちからも異なる文化に対する関心の高さを感じられた。

Jenaplanschool Hanevoetでは、ワールドオリエンテーション（日本の総合的な学習の時間と近いもの）という学習時間がある。ワールドは諸外国の世界だけでなく、自分と他者で構成される世界や自然という捉えだ。前項共通のテーマを基に、各グループでテーマを定め、そのテーマに沿って学習を進める。

－ 研修を終えて －

研修成果の活用・還元

本研修を通して学んだ学習環境の在り方について、校内研修で報告する。視察先の多くの先生方は、「子供を信じて、任せる。人は失敗から成長を得る。」ことを大切にされていたことや、共有することの重要性について話していたことが印象的だった。目の前のパソコンと向き合い、黙々と仕事をするイメージが強い日本の職員室環境を、もっと対話と笑顔のあふれる場にするために、オランダの教育機関で働く先生方を見習った行動を率先して行いたい。

感想

オランダの教育が世界的に注目されるのは、教育に対する大人たちの考え方が大きな影響を与えている。オランダには「6点文化」という「6割できれば良い、そこそこで大丈夫。」と考える文化背景がある。あまり人と比べない、好きなことを伸ばしたい子供とそれを後押しする大人の姿が、子供の幸福度につながっていると感じた。また、教具や教材、学習環境の工夫をすることで学びを楽しいものにできると再確認できた。学びの中で多くの対話をし、互いを知ることが自分も世界を構築する一員であることを実感できる。悲しみも喜びも共有する、人と関わることに労力を惜しまないオランダの人々の姿勢を見習い、大人であり教師である自分がそのような姿を子供たちに見せていくことで、対話を通して相互理解し合う人間の育成に関与していきたい。

－ おわりに －

この度は、オランダの教育視察をする機会をいただき、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった皆様には、心より感謝申し上げます。視察を通して多くの方々と出会い、刺激を受けるとともに知見を広げることができました。今回の経験を今後の教育活動に生かし、教育の発展に貢献していきたいと思います。

シドニー日本人国際学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル教育の現状



国名 オーストラリア

令和6年8月30日～9月14日

沼津市立愛鷹中学校 教諭 井出 那利子

私は、今年度沼津市の英語の教科リーダーを務めさせていただくことになり、「学びを深める」ことについて、どのような効果的な方法があるのかを考えてきた。そのような中で、多文化共生で多様性を認め合うオーストラリアでは、異なる文化背景をもつ児童・生徒がどのように学びを深めていくのかという点に興味をもった。シドニー日本人国際学級では、英語と日本語を母語とする児童・生徒と一緒に生活し、それぞれ習熟度の異なる言語レベルの児童・生徒が、教科によっては一緒に授業を受けている。日本の学校においても、近年では外国人児童・生徒数が増加し、個別に日本語指導をしたり、国際学級を設け、日本語指導をしたりする学校もある。そのような現状の中、学級に外国人児童・生徒がいる良さを授業の中でも生かし、全員にとってわかりやすい、深い学びのある授業実践のヒントを得たいと考え、研修テーマを設定し研修に臨んだ。

－ 訪問先の概要 －

① シドニー日本人国際学校 ② Monte Sant' Angelo Mercy College ③ Macquarie University

- ① 小学1年生～中学3年生までの日本人学級と小学1年生～小学6年生までの国際学級があり、日本の教育課程とNSW州の教育課程による授業が行われている。技能教科はミックス授業といって日本人学級と国際学級の生徒が共に授業を受けている。
- ② 1875年に設立されたカトリックの中高一貫教育の女子校。NSW州の教育課程とバカロレア教育の過程によるカリキュラムを実施している。
- ③ 1964年に設立された文学部、理工学部、医学・健康・人間学部など複数の学部のある質の高い教育活動を行っている大学。広大なキャンパスはアボリジニの土地にあり一部は国立公園となっている。

－ 調査結果 －

プレゼンテーション、ディベートやディスカッションを重視した教育

オーストラリアの教育制度は、国の指針である「オーストラリアのカリキュラム」を元に、各州が独自の教育課程をもち教育を実践しているが、一般的には、就学1年前から中学3年生までが、義務教育である。その後、自分の進路に合わせて進学や就職の準備を行う。自己表現力をつけるため、プレゼンテーションやディベート等に力を入れて行っている。幼稚園では、「Tell & Show」といって、自分のお気に入りのものをみんなに紹介するという活動を行っている。教育学部においても、講義式が主流ではなく、昨今の教育問題に関して学生が自ら問題を提起し、それについて調べ、ディスカッションするという、問題解決型の授業を実践している。



Macquarie 大学でくつろぐ学生

「わからない」と当たり前と言えることの大切さ

シドニー日本人国際学校では、文化背景の異なる児童・生徒と一緒に授業を受け、学校行事を行っている。わからないことがあるのは当然のことで、「どうのことですか?」「わかりません。」「～ということ?」等の質問やつぶやきが自然に発せられ、それに対して学級の仲間や先生が教えたり、一緒に考えたりしていた。日本に住んでいると、分かって当然と考えてしまったり、相手の反応を予測してしまったりすることがあるが、シドニー日本人国際学級では、知らないことやわからないことを、積極的に聞いていた。先生方は、それぞれの文化の良さを引き出すように、児童・生徒のつぶやきをひろったり、声掛けをしたりして、授業が活気のあるものとなっていた。日本人学級と国際学級の生徒は、技能教科を一緒に受けるが、その中でも自然に教え合いが行われていた。先生、児童・生徒が自然に日本語と英語を使い分けることで、それを聞いている周りの子供たちも場面に合わせて言語を覚えたり、理解を深めたりしていた。



体育のミックス授業の様子

国際学級では、日本語科の授業があるが、そこでも英語と日本語が飛び交い、上手に使い分けコミュニケーションをとりながら、言語を習得していた。異なる母語の同じ年齢の児童・生徒が共に生活をしたり、遊んだりすることで、その年齢に合った言語を身に付けることができることがよくわかった。日本でも各学級にいる外国人の児童・生徒に対して、教えてあげるといふ態度ではなく、互いに知らないことを学び合う、というスタンスで一緒に過ごすことが大切で、「わからない」ということを恥ずかしがらずに言える信頼関係を築いたり学習環境を整えることが学びを深める大前提となることが、わかった。

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

本研修を通じて学んだことや感じたこと、見聞きしたことなどを、沼津市の英語教科リーダーとして、英語の研修会で報告したり、日々の授業の中で、生徒に紹介したり、研究授業の授業作りに役立てていきたい。また、本校では、海外に行ったことがある生徒が少なく、海外に行くことに対して、難しいことと考えていたり、大きな抵抗感をもっていたりする生徒が多い。そこで海外を身近に感じてもらうために、オーストラリアの学校、公共の交通機関、スーパーの様子などを、授業の中で生徒に示した。また、日本とオーストラリアを比べることで、世界に誇れる日本の良さについても再認識し、オーストラリアのおおらかな国民性や雰囲気などについても、生徒にエピソードを交えて話をする中で、生徒が世界に目を向け、海外に興味をもつきっかけとしたい。

感想

「学びを深める」ことに関して、授業における教師の仕掛けである問いが重要になってくるが、前提として、人と違う意見をもつことや、自由な発想で意見を言える教室内の環境や雰囲気、子供たちのつぶやきを見逃さずに拾い、それを元に授業を進めていくことが大切だと実感した。シドニー日本人国際学校の先生方の真摯に生徒に向き合い、授業実践する姿勢を常に心掛け、外国人児童生徒がいる場合は、通常の指示や指導だけでなく、場合によっては「やさしい日本語」や英語や児童・生徒の母語を用い、全員にとってわかりやすい授業作りを目指したい。そして、多様な意見を言いやすい環境を作り、児童・生徒のつぶやきを大切にする教育実践をしたい。

— おわりに —

本研修を実践するにあたり、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援してくださった企業・団体のみなさまには、心より感謝申し上げますとともに、本研修で学んだことや得たことを日々の授業で役立てたり、研修で還元したりしていきたいと考えております。ありがとうございました。

オーストラリアから学ぶ多様性

焼津市立 大井川東小学校 教諭 横井 幸南



国名 オーストラリア

令和6年7月26日～8月3日

現在日本では、外国人児童生徒が増えており、今後も増えていくとされている。その中で互いの文化や考え方を理解し互いに尊重しあいながら生活していくことが静岡県教育振興計画でも示されている。そこで、多文化多国籍国家であるオーストラリアの文化や生活を知り、学んだことを子供たちに伝えることによって、グローバル化が進む日本でお互いの存在や考え方を大切に、日本人としてのよさや文化を大切にしていける子供たちの育成につながると考え本研修を希望した。

さらに小学校における外国語活動・外国語科の充実に向け、子供たちの「他国について知りたい。」「聞いてみたい。」という意欲を引き出すため、まず自分自身が他国の文化や生活について学ぶことが必要だと考えた。

— 訪問先の概要 —

Mount Carmel College

Mount Carmel Collegeは焼津市の姉妹都市である、オーストラリアのタスマニア州ホバートにあるキリスト教系の女子校である。学校は4学期制で、クラスごとに赤・緑・黄色の3つのチームに分かれており、ドラマや運動などでチームごとに協力した取り組みを行っている。幼児から高校生までが通っており全校で約500人。日本の小学校にあたるPrimaryでは、270人程の児童が学んでいる。外国人児童生徒は全体の約15パーセントおり、中国やインド、マレーシアやインドネシアなど多くの国とつながりのある児童が在籍している。Mount Carmel Collegeでは英語や歴史、数学、社会、体育の他に宗教教育や日本語、芸術（音楽やドラマなど）の教科を学習している。一人一台の端末も導入されており、それらを活用した授業が行われている。それに加えて、Positive EducationやWellbeingについて授業も行われていた。その授業では自分の体や心を大切にしたり、自分の強みについて考えたりする時間が設けられていた。

— 調査結果 —

日本語教育

Mount Carmel Collegeでは、3歳～16歳までの子供たちが通っているが、一番幼い3歳の子供から日本語や日本の文化に触れる時間が設けられていた。オーストラリアの多くの学校では幼い時期から英語だけでなく、他の言語を勉強する機会が設けられている。インドネシアや日本語を勉強している学校が多いそうだがMount Carmel Collegeでは古くから関係がある日本語の授業を取り入れている。Primaryでは、授業の開始時に箏や尺八、三味線による日本音楽の演奏をICT機器を用いて聴き、日本の文化に触れてから授業を行っていた。授業では児童はひらがな表を見ながら、「ごはん」や「ぎょ

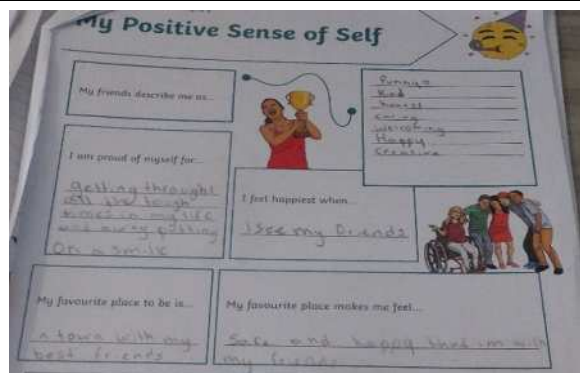


日本語の授業（ひらがな表を活用して書く様子）

うざ」などの英語を日本語に変えて書いたり読んだりする授業が行われていた。最後には日本の動画を全体で視聴し、日本の伝統的な食べ物や文化について知る時間も設けられているなど、自国だけでなく他国の文化も知り、尊重しようという雰囲気を感じることができた。

Positive education ・ Wellbeingの授業

Mount Carmel College ではPositive education や Wellbeingの授業も行われている。オーストラリアでは精神疾患が社会問題になりつつあるため、小学校段階から自分のことについて知ったり、どのように気持ちをコントロールしたらよいかを学んだりする機会が設定されていた。週に1度、専門の先生が授業を行い、自分のよさや自分の特性を知ったり、「こんな時にはどうしたらいいか。」を考えることで実際の生活に生かせるよう授業を行ったりしていた。



Positive educationのノート

多文化共生を支える多様な授業

Mount Carmel Collegeでは日本語の学習だけでなく、他の文化の学習を通して多文化共生の気持ちを醸成していることが分かった。日本のように、社会科の授業でも他国について学んでいた。カトリック系の学校であるので「religion」という宗教の授業がある。しかしこの授業では、キリスト教についての授業だけでなく他の宗教についても学び、互いの考え方を尊重して生きていくことができるようにされていた。

－ 研修を終えて －

研修成果の活用・還元

本研修を通じて学んだことについては、まず校内の職員と共有し、子供たちにオーストラリアの文化や生活について報告する機会を設ける。子供たちがオーストラリアとの生活や文化の違いに興味を抱き、他国への興味をもつとともに、外国語の授業への意欲を高めたり、日本のよさについて気付いたりするきっかけになるようにしていきたい。また機会があれば自校以外の場でも報告していきたい。

感想

オーストラリアの学校では、多様な人種が共に学んでいる様子を目で見て学ぶことができた。特に日本語教育が熱心に行われていることには驚いた。日本語だけでなくPositive educationやWellbeing、religionなどの授業を通して自分や自分たちの文化の大切さを感じることができる機会がたくさん設定されているからこそ、他の文化を受け入れることができるのだと感じた。今後は子供たちと関わっていく中で、相手のよさを受け入れることの大切さを伝えるだけでなく、その子自身のよさを本人が感じ取ることができるようにしていきたい。

また、自分自身もオーストラリアとの生活や文化の違いで知らなかった部分が多くあった。子供たちに本研修で感じたことを伝えて、文化や生活の理解の違いに目を向け、日本のよさに改めて気付いたり、他の国について知る楽しさを感じたりするきっかけを作っていきたい。

－ おわりに －

本研修を実践するにあたり、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった皆様には心より感謝申し上げます。自分自身で学びたいテーマについて、行き先や研修方法を設定することができ、充実した学びのある研修となりました。今後も多くの子供たちが、幅広い文化や考え方をお互いに受け入れられるよう、海外の文化や生活、日本のよさについて伝えていきます。

幼児期・児童期における英語教育の在り方やカリキュラムの考察



国名 オーストラリア

令和6年 12月1日～12月7日

伊豆の国市立荏山小学校 教諭 渡邊 優

テーマ設定理由

伊豆の国市では市の方針として昨年度より、幼・保育園から外国語（英語）活動が実施されている。本校でも1年生から外国語活動が行われており、外国語教育の早期教育の良さを感じている。一方、カリキュラムや指導法についての課題も多く感じている。英語専科として外国語活動の授業を行う中で、本研修を通して今後の保幼小中の外国語教育の発展に繋がりたいと思い、本テーマを設定した。

訪問先の概要

・Sydney Japanese International School（国際部・日本人部）

・Konomi kindergarten International

・Sydney Japanese International School（国際学級・日本人学級）

シドニー日本人国際学校は、日本人学校と国際学級の2つのカリキュラムで学べる一つの学校である。日本人学級では、文部科学省の学習指導要領に準拠した教育課程を編成しており、日本語による授業を行っているほか、英語科教員による「話せるようになること」を目標とした英語の授業を週5時間実施している。国際学級では、英語での授業を基本としており、NSC州の要領に準拠した教育課程を編成している。図画工作や体育、音楽などの教科において、日本人学級と国際学級の合同授業も実施しており、両国の言語に触れながら互いの国の言葉や文化を受け入れたり、理解したりすることを目的としたカリキュラムを設けている。

・Konomi Kindergarten International

木の実幼稚園は、シドニーにおいて日本人による最初のインターナショナルな幼稚園として1990年8月に創設され、英語と日本語の二カ国語による質の高い保育を行っている。園児たちが自分の体験をより深く理解できるよう保育計画を立てている。バイリンガル教育の中で、オーストラリアと日本の文化が融合したカリキュラムが特色である。また、行事を通じた学びを実践することで、園児たちの想像力を養いながら、個々のアイデンティティを育てている。

調査結果

Sydney International School 英語学習について～どの様に学んでいくのか～

シドニー日本人国際学校の国際学級では、5歳になる年（日本の年長）から義務教育が始まる。私は主に、Kindyクラス（5歳）やYear 1の（小学校1年生）の授業を参観させて頂いた。私が驚いたのは、Kindyクラスの子供たちが、担任の話す英語をしっかりと聞き取っていたり、お互いに話をしたりしていたことだった。また、フォニックスを大切にしていることが印象に残った。入学当初から毎日発音の練習をくり返し行っているとのことだった。

参観させて頂いた授業では、1クラスの中で3つに分かれ、Reading, Writing（文章構成）、タブレット学習を行っていた。Readingでは、先生が読み絵本を聞きながらどんな話なのか内容を理解したり、単語の意味を学習したりしていた。1つ1つの単語の練習をするのではなく、絵本の中のイラスト、前後の文章の意味、先生が出すヒント（動作）から内容を捉えていた。また、文章構成を学ぶグループも、最初から文法を学ぶわけではない。例えば複数形を学ぶ時、何回もイラストと文章を見せることで、子供たち自身が違いに気づき、2つ以上の時に「s」が付くということを、自然に理解するようにしていた。タブレット学習では、既習事項を1人ずつタブレットを使って復習をしていた。



Sydney International School 他言語を学ぶことについて

国際学級（普段英語で話す）の子供たちが、日本語を学ぶ授業も参観させて頂いた。国際色豊かなオーストラリアは、それぞれ家庭環境も様々で、家に帰れば英語、ロシア語、中国語、様々な言語で会話をする子供たちがどの様に他言語（日本語）を学ぶのか興味深かった。教師側もその時間はできるだけ全て日本語で話すことを心掛けることを大切にしていた。教室の環境を日本風にしたり、子供たちが興味を持ちそうな日本のおもちゃ（けん玉、こま等）も置いてあったりもした。担任の先生からの話では、様々な言語を家庭で使う子供たちは、家に帰ってもなかなか日本語を使う機会がない（必要感を感じない）ため、まずは、学校生活で使う言葉に絞り、日本語を教えていき、子供たちが日本語を使う必要感を得られるようにしているということを知った。

Konomi Kindergarten International 幼児期からの言語学習

木の実幼稚園では幼児期より、人権教育・人前で話すこと・食育・ICT教育・STEM教育など様々な事を大切にし、園児一人一人の自我意識の確立を目指していることが分かった。幼児期の子供がこれを達成するためには、担任が一人一人の事をよく見て理解することが必要である。園では、子供一人一人の記録を取り、その子に合った指導や対応をしていることが、大変素晴らしいと思った。

“Show and Tell”の活動では、幼稚園の時から自分の想いをもち、皆の前で話すことを大切にしていた。テーマに沿って話をし、例えば、「自分たちで園でペットを育ててみたい」というテーマで話した際には、自分たちの手でペットを育てるには、どんなことが必要なのか計画を立てて話す姿もあったと聞いた。これらの話し合いの活動が、小学校に入った時にも大いに生かさせると感じた。



— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

本研修を通して、外国語の授業の中で活用できることも多くあると感じた。①子供たちに新しい言葉を教える時は、ただ発音を繰り返してALTの後に続いて言ったりするのではなく、ICTや視覚的に分かる教材を用意し、子供たち自身がどんな意味なのか考え想像することで力を付けていく。②単元を学ぶ時のゴール（目的）をはっきりさせ、目的を達成するためにどんな言葉を学んだり、どんな話し方が必要なのか考えたりして学習に取り組ませていく。③他国の文化を多く伝えることで、英語を学ぶことの楽しさや必然性を感じるようにもしていく。④1、2年生の授業にフォニックスを取り入れ、低学年の時からたくさんの音に触れることで、中学年や高学年の外国語学習に繋げていく。以上4つのことを実践し、今後も英語を楽しく学ぶ環境を整えていきたい。

感 想

外国語（英語）を学ぶことの大前提として、「どれだけ必要感を感じられるか」が大切だと思った。本校で外国語の授業を行っていても、子供たちの中には外国語を学ぶ必要感を感じていなかったり、翻訳機能を使って会話をしたりするから学ばなくても大丈夫だと考えている児童もいる。教師側が、できるだけ他国の文化を紹介したり、英語を学ぶことでどんな良いことがあるのか伝えたりすることで、子供たちに英語を学ぶことの必要性を感じてもらうことが重要だと改めて認識した。また、何より相手とのコミュニケーションを取ることや、英語を学ぶことが楽しいと感じられるようになってほしいと思いを強く抱き、それに向けて、教材研究や授業を行ってきたい。

— おわりに —

本研修を実施するに当たり「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった企業・団体の皆様には、心より感謝申し上げます。今回の研修で学んだことを、これからの教育活動にも生かしていきたいと思います。